

Title	アイヌの研究(金田一京助著, 内外書房発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.140(300)- 141(301)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アイヌの研究 (金田一京助著)
(内外書房發行)

太平洋上の唯一國家として建國以來二千年の歴史を有するにも
か、はらず、太平洋に對してはほとんど何等の學術的貢獻をなして
ゐないことは、わが國の一大恥辱である。或る地理學者がのべら
れたこと、もし吾々がわが領内に於ける異民族の學術的研究を
怠り、却つてこれを外人の手に委するがこと、さうであるか、は
ば、たさひわが國が滿蒙シベリヤをその版圖とし、太平洋をその
湖水とするがこと、政治的發展をなし得たこと、文化國としての
光榮がいづこにあらうか。現在わが領内には南に臺灣の生蕃、北
には北海道、樺太のアイヌ族があり、いづれもわが大和民族とは
著しく人種、文化を異にしてゐる。生蕃は大體に於いてマライ人
種とされてゐるけれども、そのこと、さうであるかは疑は
しく、そこになほ研究の餘地があり、またアイヌ族が何人種に屬
するかもいまだ確定しない。西洋の人類學者はアイヌ族の容貌、
骨格、及び毛髪の特徴が白人に類似するところから、恐らく白人
の石器時代の殘存者であらうと推定するのであるが、なほ言語の
研究においてこの推定説を肯定すべき結論が出ないのであつて、
これは將來の研究にまたればならない。しかもこの兩民族は單に
わが領内に存在するさいふのみならず、幾多の民族の混合からな

れる今日の大和民族の要素として、たしかにこの兩民族もかぞへ
得られるのであるから、實に兩民族の研究はわれわれ自身を知る
ことであつて、當然わが國人の手によつてその成果をみなければ
ならぬのである。しかるに學問と言へば醫學、法學、經濟學、或
は工學のごとき實用學以外には、あまりその價值と權威とを認め
ないわが國である。その研究がわれわれの義務であるにもか、は
らず、また研究の便宜を最も多く有するにもか、はらず、眞面目
なる専門學者の出づることなく、多くはこれを外人の手に委れて
恬として恥ぢないわが國である。その國においてひさり金田一氏
は多くの犠牲を拂ひ、多くの困難を闘ひつゝ、わが國の代表的ア
イヌ語學者としてすでに多くの尊き論著を公にされたが、今般ま
た『アイヌの研究』を刊行されたことは、ひさり著者の光榮のみ
ならず、チアンパレンヤバチエラーを有せざるわが學界の誇であ
らねばならぬ。

本書は氏が多年にわたつて發表したる論文の中より修補訂正し
て一書にまとめたものであつて、第一章序論においてアイヌ研
究の問題と目的とをのべ、以下第二章アイヌの生活、第三章蝦夷
とアイヌ(歴史的考察)、第四章同上(言語的考察)、第五章アイヌ
の傳承、第六章詩歌、第七章神話、第八章宗教、第九章アイヌと
義經傳説、第十章結論、及び附録一、中世の蝦夷の研究、二、蝦

夷語學の鼻祖上原熊次郎先生逸事に分たれ、いたるところこの廢殘的民族に對して深甚なる同情がそゞがれてゐる。さうして彼等の心情を融合して、そこから自らに理解を得やうとするつゞしみぶかい態度を、あくまで獨斷を避けやうとつゞめらるゝ謙遜を周到なる用意とは、氏にのみ許されたる奥床しさである。

吾々はわが國史を繙くとき、わが大和民族が長い間接觸闘争したる異民族として東北における蝦夷に會するのであつて、吾々は直ちにこの蝦夷を今日のアイヌに擬定しようとするのである。しかしこれは最も素朴的方法と言はればならず、そこに學問的證明を要するのであるが、吾々は本書によつて始めてその解決を與へらるゝのであつて、『上の方から蝦夷を辿つて降ればいつしかアイヌになつて來、下の方から北海道のアイヌに遡つて辿つて行く過去の蝦夷になつて、この間に寸分の切れ目がない』ことを知り、またこの民族の稱呼であるアイヌ、アイノ、エミシ、エビス、及びエヅの關係についても明快に教へらるゝのである。最近また世上に喧傳されたるシンギス汗は義經なりなどといふ議論は、本書の義經傳説を一讀すれば到底唱へ得られない俗論であることがわかり、また蝦夷に關する古文獻の研究のごときは、異民族に對して理解すくなき歴史家の蒙を啓くこと頗る多大であらう。殊に著者が敏感なる言語學者であるだけ、その傳承や詩歌は他の追隨を許さない獨特のものであることは言ふまでもない。

要するに本書は著者の十數年間の勞苦より生まれたる紀念塔であつて、同時にわが日本人の手になれる眞に唯一の綜合的アイヌ

研究書を稱すべく、本書を得たことによつてわが學界に如何ばかりのつよみを感ずることであらうか。著者に對してこゝにかぎりなき敬意をさしげたい。

(松本芳夫)

アイヌラツクルの傳説

(金田一京助著 世界文庫刊行會編並發行)

今は亡きアイヌの乙女が、「太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて野邊に山邊に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も又何處。僅に残る私等同族は、進み行く世のさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは一舉一動宗教的感念に支配されてゐた昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがられればならぬ」と嘆き悲しんだ、政治的滅亡に類したアイヌの間にも「其の昔此の廣い北海道は私等先祖の自由の天地でありました。天眞爛漫な稚兒の様に美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活してゐた」(アイヌ神話集)のであつた。然し悲しい事には其の自然的平和が生んだものも乙女に取つては「愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる爲に用ひた多くの言語、言ひ古し、殘し傳へた多くの美しい言葉、それらもみんな果敢なく亡び行く弱きものと共に消失してしまふのでせうか(同上)と不安な落ちつきのないオロ／＼とした氣持に憐まされ、すべて彼等が生んだ物語や、神々の話を記し留めようとした、かよわいながらにも、雄々しい氣持は、僅に「アイヌ神話集」一篇で終つて亡き數に入つてしまつた。よしまらば彼女の啣つように政治的に民族が滅ん